

型を教える小論文指導～市毛氏の追試

橋本 泰央、畑山 元政、甲斐 範光、川崎 一郎

How to teach the “format” of essay ～ repeat study of Mr.Ichige's lecture

Yasuhiro Hashimoto, Motomasa Hatakeyama, Norimitu Kai, Ichiro Kawasaki

要旨

講義で小論文指導を行い、市毛の指導法を追試した。全員が事実に基づいた小論文の書き方ができるようになった。アンケートでは学生の9割以上が分かりやすかったと回答した。型を教える市毛の小論文指導法は短期大学においても有効である。

1 はじめに

主に小中学校において小論文指導を行っていた市毛の指導法は短期大学においても有効である。今回市毛の小論文指導(市毛, 2010)を知る機会を得、その指導方法を追試した。

2 小論文の定義

市毛は本の冒頭で以下のように示したり。

1 小論文とは、論理的構成と論理的文体とを備えた学習用の四〇〇字以内の文章のことである。

2 論理的構成とは、「事実と考察」を中心とした文章のことである。

3 論理的文体とは、「事実と考察」とを簡潔、正確に表現する文体のことである。(文学的文体と区別する)

4 小論文には「記録・報告・説明・論説」の四種類がある。(新学習指導要領ではさらに数多く示された)

5 小論文は物語(文学的文章)とは違う成立の歴史を持つので、独自の順序正しい指導が必要である。(科学論文は自然科学の成立とともに発達した歴史がある)

6 新学習指導要領では全教科に「表現力」の項を設け、国語科とともに論理的表現力の育成を期待している。

今後述べる小論文とは上記の文章を指すこととする。

3 指導の特徴

市毛は小論文の型(構成)を明確にした指導を行う。型の指導において特徴的なのは以下の3点である。

① 分量の制限

市毛が生徒に書かせる分量は400字詰原稿用紙1枚である。小論文指導の目的を「事実をもとにした論理的思考を身に付けさせる」ことに置いているからだ。名文や美文、あるいは長い(分量の多い)小論文を書かせることは指導の目的ではない。事実を積み重ね推論するという自然科学的思考に基づいた文章、読めば思考の筋道を辿りうる文章を書かせることに主眼を置いている。一度に全体を俯瞰しうる400字詰原稿用紙1枚に分量を限定することは、論理的思考を身に付ける訓練をするためには最適である。

② 段落構成の明確化

書き始める前に段落構成を明確にする。原稿用紙を配布した時点で原稿用紙の罫線と罫線の間に赤鉛筆(赤ペン)で線を入れさせ、原稿用紙を全部で5つの段落に分けさせる(資料1)。「はじめ」「なか(1,2)」「まとめ」「むすび」である。「はじめ」は2行(40字)、「なか(1,2)」はそれぞれ7行(140字)、「まとめ」と「むすび」はそれぞれ2行(40字)とし、それぞれの段落の役割も明確に規定する(表1)。

各段落の文字数の割合は市毛が各種の科学論文約100編の文字数を調査したうえで割り出したものである。学生には定められた文字数の中で、定められた役割に従って書くように指導する。定められた文字数は「なか」に書くべき具体例の書き方の「詳しさ」を規

表1 段落の役割と文字数

構成	役割	文字数
はじめ	全体のあらましを書く	2行(40字)以内
なか	1 一つの具体例を詳しく書く。感想・意見は書かない。	7行(140字)以内
	2 「なか(1)とは別の具体例を1つ書く。感想・意見は書かない。	7行(140字)以内
まとめ	「1」と「2」とに共通する感想・意見を書く。	2行(40字)以内
むすび	「まとめ」の感想・意見が全ての人にあてはまるという主張を書く。	2行(40字)以内 (論説だけ)

【市毛勝雄、DVD付授業マニュアル『小論文の書き方指導』。明治図書、2010、P.20より作成

定する。

③ 「キーワード表」、「小論文の書き方」プリントの使用

各段落にはそれぞれの役割がある。各段落に書く事柄はそれぞれ1つである（一段落一事項の原則）。

この原則を学生に意識させる手立てとして市毛はキーワード表を用いる（資料2）¹⁾。

「なか」に書くべき具体例として10個（挙げられない場合は必ずしも10個である必要はない）挙げさせる。その中から最も印象的なものを2つを「なか」の内容として採用させるのである。その2つを受ける「まとめ」もキーワード表に一言で書かせることで文章構成がひと目でわかる。

「小論文の書き方」には小論文の形式や論理的文章の種類、キーワード表や小論文を書くときの注意が載っている（資料3）¹⁾。ここに載っている小論文を書くときの注意が、学生が書く際の指針となり、学生の小論文の評価基準ともなる。

4 対象

講義の対象はライフケア学科身体機能ケア専攻柔道整復コースI部の学生54名（男性28名、女性26名）である。

5 指導の方法

講義ではグループワークを多用した。6人一組のグループを作り、1本の小論文を仕上げるたびにグループ分けを変えていった。

小論文のテーマは「短大生活」「足趾の包帯法」「柔道」など、学生全員に共通するテーマを用いた。

原稿用紙は中央に「柱」のないものを用いる。行数が分かりにくくならないようにするためである。

書き始める前に赤鉛筆（赤ペン）で罫線と罫線の間に線を入れさせる。1回目の指導時には各段落の上（罫線の外）に段落の役割を書き込ませた。「はじめ」「なか1」「なか2」「まとめ」「むすび」という具合である。清書用原稿用紙にも線を引きさせた。定期試験では初めから線を入れた原稿用紙を配布した。ただし、段落の役割を罫線の外に書き込ませる指導は一番初めの1回だけとした。

原稿用紙に線を引きいたら、次にキーワード表の作成を行う。

テーマに沿ったキーワードを10個列挙する。列挙できる数が少ない場合にはグループメンバーのキーワードを写しても良いこととした。また、早く書けた学生には黒板に自分の書いたキーワードを板書させる

ことで、遅れている学生の参考になるようにした。

キーワードを10個挙げたら、そこから最も印象的なものを2つ選ばせ、一番印象的なものを「なか2」の、次いで選んだものを「なか1」のキーワードとさせる。最も印象的なものを「なか2」のキーワードとするのは、その後の「まとめ」「むすび」とのつながりを重視するからである。

原稿は「なか2」から書き始める。最も印象的な分であり、「論理的文章は実験・観察・調査という「内容」が先に存在している」¹⁾からだ。

書けたら持ってくるように指示をする。持ってきた学生の文章には全て○をつけ、黒板に書くように指示する。この指示には時間調節の意味と、まだ書くことができないでいる学生の参考にする目的がある。また、グループメンバーの文章、あるいは板書された文章を写しても良いと伝える。書くことができない学生にとっては、クラスメートの文章を写すこと自体が勉強になるからだ。原稿のチェックは全ての学生に対して行う。

1行や2行しか書いていなくても○をつける。初めは分量にはこだわらない。書くこと自体に苦手意識を持つ学生が多いと思われるので、まずは書いてあればよしとした。

「なか2」が書けたら「なか1」を書かせる。こちらでも書けた学生は持ってくるように指示する。チェックは段落ごとに行う。学生は最終的に全ての段落にチェックの○をもらうことになる。全ての段落にチェックの○をもらった学生には清書用の原稿用紙を取りに来させ、段落を分ける線を引きさせてから清書を書かせる。その際に下書きと異なる文章（一部変えた文章）を書かせても構わない。

完成したら、キーワード表、下書き用原稿用紙、清書した原稿の順に重ねてホチキス留めをさせ、提出させる。

提出させた原稿の中から良く書けている原稿をいくつか選び、名前は伏せて次の時間に読み上げる。クラスメートが書いた文章を聞く経験が次回小論文を書く際の参考になるからである。

半期の講義の中で小論文を書く際の決まりを徹底させる手立てとして「小論文の書き方」を毎時間斉読させた。決まりの1つ1つを解説することはしなかった。

市毛は1回45分の授業4回で1つの小論文を仕上げるように授業を組んでいる。

短大では1回の講義時間は90分である。1本目の小論文作成には90分4コマを使った。原稿用紙に線を引き作業およびキーワード表の作成で1コマ、「な

『小論文の書き方指導』市毛勝雄、明治図書、2010より

小論文の書き方		
1 形式(400字)		
構成	役割	文字数
はじめ	全体のあらましを書く。	2行(40字)以内
なか	1 1つの具体例を詳しく書く。感想・意見は書かない。	7行(140字)以内
	2 「なか1」とは別の具体例を1つ書く。感想・意見は書かない。	7行(140字)以内
まとめ	「1」と「2」とに共通する感想・意見を書く。	2行(40字)以内
むすび	「まとめ」の感想・意見が全ての人にあってはまるという主張を書く。	2行(40字)以内 (論説だけ)

2 論理的文章の種類

- (1)記録 ことがらを時間通りに書いた文章。「なか1・なか2・なか3…」(日記・観察記録・実験記録)
- (2)報告 新しいことがらの発見を詳しく書いた文章。発見したことを発表すること。自然科学の論文はすべてこの報告である。報告の文章は決められた形式「はじめ・なか1・なか2…まとめ」で書かれる。「なか」は文章、写真、統計等。(リポート。自然科学専門誌はリポートで形成されている。現象・事実新発見の報告は、多数の追試による確認を受けて、「事実」として認定される)
- (3)論説 多くの記録・報告をもとにして、最後に「主張」(むすび)を述べた文章。経済学・教育学・社会学等の論文、新聞社説・月刊雑誌(文藝春秋・中央公論等)の論文等。
- (4)説明 新しいこと・もの・珍しいこと・ものの性質・性能などを分かりやすく書いた文章。わかりやすく話して説明すること(口頭発表、オリエンテーションなどと言う)。「はじめ・なか1・なか2・なか3…まとめ」の形式によって述べる。

3 キーワード表

テーマ 短大生活

題名 講義 (テーマと区別する)

講義

短大に進学した。(はじめ)

解剖学の講義を受けた。(なか1)

包帯法の実習があった。(なか2)

難しかった。(まとめ)

キーワード表(「講義」から抜き出そう)

キーワード	段落	文章構成
	①	はじめ
	②	なか1
	③	なか2
	④	まとめ

4 小論文を書くときの注意

- (1)「です、ます」を使わず、「である」を使う。(「楽しかったです。」のように幼稚な文になるから)
- (2)慣用句を使わない。(文章の個性がなくなるから)
×テストは楽勝だった。→○テストはやさしかった。
- (3)「…ない」という否定表現は内容をあいまいにする。肯定表現で書く。
×賛成ではない。→○反対だ。
- (4)「…して、そして、それから」を使いすぎない。(中心がわかりにくい文章になる)
×朝起きて、そしてご飯を食べて、靴を持って…
- (5)「、」は意味の切れ目に一文に1カ所だけ、うつ。
×うんこの場所で食事にしよう。→○うん、この場所で食事にしよう。
- (6)名詞で文を切るのは詩の書き方で、意味があいまいになるから、小論文では使わない。
×私の好きな花、ばら。→○私はばらの花が好きだ。
- (7)「はじめ」には感想・意見は書かない。(感想・意見は「まとめ」に書く)
×4月10日に行った山下公園はとても楽しかった。→○4月10日に山下公園に行った。
- (8)「なか1・なか2」を詳しく書くため次のような技術がある。
- ①地名、人名、交通機関名、月日、時刻、品名、値段、回数などを書く。
×ある日の午後、町で友人に会った。→○10日、午後3時ごろ、山下書店で橋本さんに会った。
 - ②会話の文は、小論文では改行しないで続けて書く。
○母が「今日は遅くなるわ」と言った。私は「夕食の支度をしておくよ」と答えた。
 - ③場面の中心を決めて、中心をくわしく書く。
×朝起きて、顔を洗って、ご飯を食べて→○朝6時に食事の支度を始める。お皿4枚にパン…
 - ④「なか1」と「なか2」が時間でつながっていると、1つの例と判定される。区別された2つの例が必要である。
○「なか」では、ことがらだけを詳しく書き、感想・意見を書き込まない。
×おかずの準備はとても面倒だ。なぜかという→○おかずの準備は、味噌汁の裏を洗うことから始める…
 - ⑥「たとえ・比喩・金言・名句」の引用は、言葉であって事実ではないから、「なか」の役割を果たさない。
×教室の掃除は、言わば「心の修行だ」… →○教室の掃除は、窓を開けることから始める…
- (9)「まとめ」を書くとき、いくつかの「なか(具体例)」の中から「まとめ」の観点到びつたりな例を選び直す、質性のある論文になる。
- (10)論文を書く順序として、「なか2」→「なか1」→「まとめ」→「むすび」「はじめ」の順に書くとき、書きやすい。
- (11)「題名」は小論文を全部書いてから決める。「まとめ」「むすび」のキーワードから選ぶと、良い題名になる。
- (12)「むすび」(主張)は、「まとめ」(他人の感想・意見)が「多くの人に共通すること」(一般化)を述べる。(まとめ)母がいなくて心細かった。(感想)→(むすび)家族の大切さがわかった。(一般化)

か2]「なか1」の作成で1コマ、「はじめ」「まとめ」「むすび」の作成および2次原稿（清書）で1コマ、読み上げで1コマである。

2本目以降は上記の流れを90分3コマで行った。原稿用紙に線を引く作業から「なか」の記述までが1コマ、「はじめ」「まとめ」「むすび」の作成から2次原稿作成までが1コマ、読み上げで1コマである。

6 学生の小論文

まずは正確な文章を書けているか否かを調べた結果を図1に示す。これは学生が書いた2本目の小論文（テーマは「足趾の包帯法」）を調べた結果である。調べる際の視点は向山（2001）²⁾を参考に以下の7点とした。

- ① 文末表現が一貫していること。
- ② 主語と述語があること。
- ③ 漢字、ことばづかいが正確なこと。
- ④ 助詞（テ、ニ、ヲ、ハ）が正確に書けること。
- ⑤ 句読点が正しく打ってあること。
- ⑥ 主語と述語の対応をしっかりとさせること。
- ⑦ 1つの文は長くだらだらしないで、短くすること。

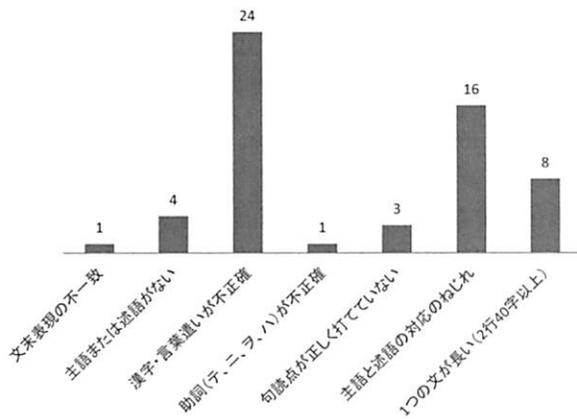


図1 文章の誤りの種類とそれぞれの人数

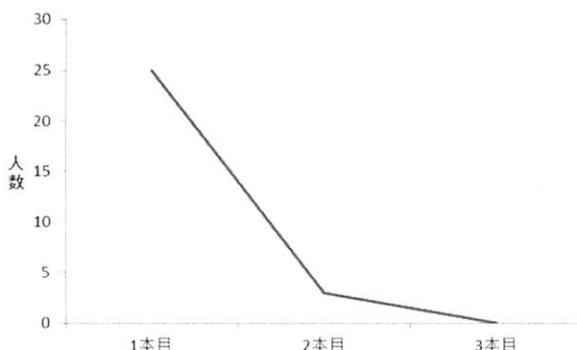


図2 「はじめ」「なか」に感想・意見を書いた学生の数の変遷

次いで、学生の小論文の「なか」を資料4～6に示す。資料4は1本目の小論文でテーマは「短大生活」、資料5は2本目でテーマは「足趾の包帯法」、資料6は3本目でテーマは「柔道」である。

1本目から3本目の小論文において、「はじめ」「なか」に感想・意見を書いた学生の数の変遷を図2に示す。1本目の時点では「はじめ」「なか」に感想・意見を書いていた学生が25名、2本目では3名、3本目では0名であった。

7 学生の感想

最後の講義で授業に対するアンケートの記入と感想文の提出を学生に求めた。

アンケートは「全然そうは思わない」を1、「非常にそう思う」を5とする5件法にて回答を求める6項目と自由記述3項目からなる。

5件法によるアンケート結果のうち、授業内容のわかりやすさを聞いた質問項目、および学生自身の講義に取り組む姿勢を聞いた質問項目に対する回答結果を図3、4に示す。

感想文は「あなたはこの授業で何を学びましたか」というタイトルで400字詰原稿用紙に自由に記述させ

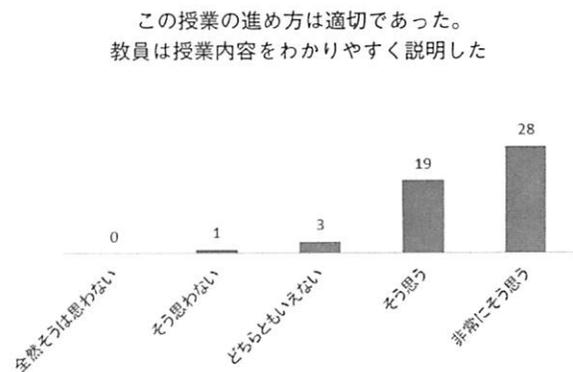


図3 アンケート結果

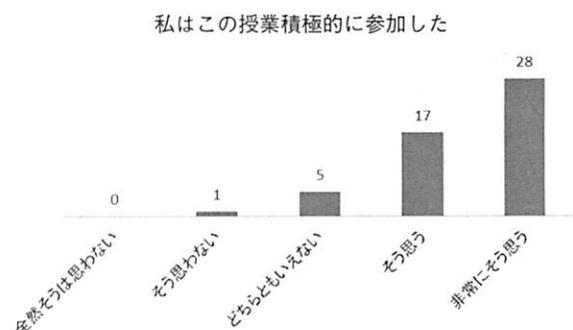


図4 アンケート結果

た。その中から、段落構成とその役割を明確にした今回の指導についての感想をいくつか抜粋する。

「一番戸惑ったのは、まとめと結び以外には自分の意見・感想が書けないということである。」

「高校と違い、はじめから文章を書くのではなく、“なか2”からの書きはじめだ。最初はすごくとまどったけど、何回か書いていくうちにその方が書きやすくなった。小論文の書き方①～⑫を音読していくうちに自分の中でそれがルールになっていった。」

「高校でも小論文の書き方を習ってきたが、あまりよくわからなかった。しかし、この授業では書き方が良くわかり、とてもスムーズに書くことができた。」

「作文と違って、小論文は、はじめ・なか1・なか2・まとめ・むすびがあって、どこに何をどうやって書けばいいかがわかりやすかったです。」

「文章のなか1、なか2で、感想意見を書きこまないということは、苦勞する人が多いと思います。ですが、これができれば長い文章も書きやすくなると思いました。」

「はじめ、なか1、なか2、まとめ、むすびなど具体的に学べたので自分のためになった。」

今回の授業で学生がどのように感じたかを以下に紹介する。

「この授業で学んだことによって小論文をスムーズに書けるようになった。」

「1から教えてくれたのでわかりやすく、とても自分のためになった。」

「文章の書き方がわかるようになりました。」

「自分でも最初の文との違いを実感している。」

「朗読と小論文を書く行為を重ねていくたびに知識が重なりどんどん書けるようになったのがとても実感できた。」

「この授業を通して字を書くことが好きになった。」

「自分が小論文をちゃんと書けるようになっていないなかったので嬉しいです。」

8 考察

①正確な文章を書かせる指導

今回抜け落ちたのが「正確な文章を書かせる」指導である。

今回は「小論文の書き方」に依拠して学生の小論文を指導した。逆に「小論文の書き方」に書いてないことについては有効な指導の手立てを持たなかった。

「小論文の書き方」には意味の通じる文（達意の文）

を書く際の注意点についての記述はない。市毛も「ごく常識的な観点は省いてある」としている。

しかし、意味の通じる文を書くことは訓練なしには難しい。学生の文にみられた誤りとその人数を示した図1の通りである。

漢字の間違いは柔道整復の専門用語に多かった。その時のテーマが「足趾の包帯法」であり、習ったばかりの専門用語を使わざるを得なかったせいでもある。

気になったのは主語と述語の対応ができていない学生が多かったことである。文が長くなる（2行40字以上）と主語と述語の対応が乱れる傾向が強かった。しかし、40字に満たない文章でも主語と述語を適切に対応させることができていない学生がみられた。

物事を頭で考える場合や話をする場合に、我々は主語と述語を厳密に対応させている訳ではない。しかし文章を書く際には厳密な対応を求められる。論理的な文章は正確な文章なくして成り立たない。そして正確な文章を書くには訓練が必要である。

社会に出て文章を書くことを求められることは意外と多い。業務の申し送りや業務日誌、上司への報告レポート、仕事先への手紙、メールでのやり取りなどである。正確な文章を書く力は社会人にとって必須である。

社会人への準備として、また論理的な思考を育てるためにも、正確な文章を書く訓練は継続的に行っていく必要がある。

②小論文の型の指導

最後の講義で行ったアンケートは作成上のミスで本来2つの質問項目からなるべきところを「この授業の進め方は適切であった。教員は授業内容をわかりやすく説明した。」と1つにまとめてしまった。そのためアンケートの評価（「そう思う」「非常にそう思う」合わせて47人（92.2%））をどのように解釈するかについては難しい。しかし、自由記述のアンケートを見た限り、学生は小論文の書き方については分かりやすかったと感じたようである。何を（段落の役割）、どのくらい（段落ごとの文字数）、どのように書けばよいのか（小論文の書き方）が明確であったこと、つまり型が決まっていることが学生には分かりやすさとして感じられたのではないかと考えられる。

「小論文の書き方」にある注意点の中で、指導の際に特に意識したのは「はじめ」「なか」には感想・意見を書かない」という点である。事実を基に考察する態度が論理的思考に繋がると考えたからだ。

また、事実だけを書こうと意識することで、学生は自分がどこまで分かっている、何が分からないのかが明確になる。対象についての自己の認識を再確認することができる。教員からすれば学生の理解の度合いを小論文を通して評価することが可能になる、ということでもある。

これは小論文の型を指導するからこそ期待できる効果である。

「はじめ」と「なか」には感想・意見を書かないという指導に学生は初め戸惑ったようである。図2を見ると、1本目の時点では「はじめ」「なか」に感想・意見を書いていた学生が25名いる。しかし、回を重ねるごとにそのような学生の数が減っていることがわかる。

「なか」をどのように書くかといった個別指導は行っていない。行ったことは「小論文の書き方」の斉読と早く書けた学生に板書させて、それを必要に応じて訂正すること、および良く書けている文章を読み聞かせることである。それらを通じて「なか」の書き方のイメージが学生の中にできていったのではないかな。

ほぼ毎時間行った斉読に対してはアンケートで賛否両論があった。短大生ということ考えると毎時間行う必要はなかったかもしれない。

また、斉読させる際の方法のバリエーションを筆者は持たなかった。単調な感覚を覚え、苦痛を感じた学生もいたのかもしれない。どの程度読ませるか、読ませる際の方法については今後の課題である。

また、段落を一つ埋めるごとに行ったチェックも分かりやすさに繋がったと考える。一番長い段落が「なか」で7行(140字)である。400字詰原稿用紙を冒頭から順番に埋めていくことに比べ、そのハードルが低いことは明らかである。

さらに、段落内の文字数を必ずしも満たさなくても良いとしたこと、およびグループメンバーあるいは黒板に板書したクラスメートの文章を参考にしても写しても良いとしたことも、書くことに対する学生の心理的なハードルを下げたと思われる。

以上の全体的な取り組みが、学生の「わかりやすかった」という感想に繋がったものと思われる。

9 まとめ

正確な文章を書く力は社会人に必須である。小論文の指導を通じて正確な文章を書く力を学生に身に付けさせるべきである。

小論文の指導では型を指導すべきである。型を指導することが事実を基に考察する論理的思考を育てることに繋がる。

また、小論文を書かせることで学生の知識・理解の度合いを評価することが可能である。

型を教える市毛の小論文指導法は短期大学においても有効である。

参考文献

- 1) 市毛勝雄. DVD付授業マニュアル 小論文の書き方指導. 明治図書, 2010
- 2) 向山洋一. 教え方のプロ・向山洋一全集 22 子供の知性を引き出す作文の書き方. 明治図書, 2001

資料4 学生の小論文「短大生活」の「なか」

四月九日レクレーションの終わりに授業が初
 まった。高校では五分授業だったが大学で
 は十分授業だ。実習は楽しくやっていた。休
 息時間は大変だ。九十分間座り続けるのはま
 づかないが徐々に慣れるようになった。

私は、学校に通うのに二つの電車に乗る。
 一本目は小田急線で、二本目は京王新線であ
 る。片道一時間半くらいかかる。

授業は、はじめに下腿と足趾の位置を
 確認する。その際、皮膚同士がくっつくと
 いうようにする。その際、一本目を足に巻く。一本目
 と二本目を一緒に巻いた後、足趾を螺旋状に巻
 く。足首を環行して終わると良い。

資料5 学生の小論文「足趾の包帯法」の「なか」

母趾部は、始めに下腿と足趾を九十度
 角に立て、その間に足趾を置く。下腿は、
 表巻きの順番で環行する。この時、
 母趾部は、足趾から母趾部へ環行する。この時、
 足趾は二周巻く。そして足趾から下腿まで環
 行する。ここは螺旋状で巻いていく。ここ
 までを繰り返して、下腿まで巻いていく。

母趾部には八裂包帯を使う。術者は座って、
 る患者に対し、正対で巻くのが包帯を
 巻く時の基本である。

その中の一つに足趾のBとDの位置がある。
 起始は下腿だ。二本の指を一緒に巻く。巻
 き方である。その際、皮膚同士がくっつくと
 いうようにする。その際、一本目を足に巻く。一本目
 と二本目を一緒に巻いた後、足趾を螺旋状に巻
 く。足首を環行して終わると良い。

